

意識と行動の両方から アプローチすることが より良い未来を創り出す 「私たちはつながっている」という世界観が大事

榎本英剛

フィンドホーンでの暮らしがきっかけとなり、日本でいくつかの市民活動を始めた榎本英剛氏。

世界的なコーチ養成機関であるCTIのプログラムを日本で提供するCTIジャパンの創設者であると同時に、ともに持続可能な社会の実現を目指すアメリカ発の“チェンジ・ザ・ドリーム”と、イギリス発の“トランジション・タウン”という、2つの草の根運動を日本へ導入した立役者でもある。その榎本氏に、脱原発や環境問題、これからの社会のあり方について伺った。

取材・文◎鈴木てつや Interview&Text by Tetsuya Suzuki

より良い未来を創るために 必要な2つのアプローチ

榎本 私は、原発や環境破壊などの問題を乗り越え、より良い未来を創っていくために、必要なアプローチは、大きく分けると2つあると思っています。ひとつは意識特にもその見方を変える。内からのアプローチ。もうひとつは行動、すなわち暮らし方を変える。外からのアプローチです。この2つのアプローチは、どちらか一方が大事なわけではなく、両方大事だと考えています。私はこれまで、大きく分けると3つの活動をしてきましたが、ひとつは12年ほど前からやっているコーチングの事業です。そして、イギリスのフィンドホーンに2年ほど住んでいる時に出会った「チェンジ・ザ・ドリーム」と「トランジション・タウン」という活動です。

「私たちはつながっている」という世界観が大事

原発や環境破壊など、世界が直面しているあらゆる問題は、その大元を辿っていくと、意識の問題が大きくかかわっています。「チェンジ・ザ・ドリーム」では、結局すべては世界観の問題だと言っています。つまり、人が世界をどう見ているのか、これがそもそも

の問題を生み出していると考えています。

もともとこの活動は、アメリカのパチャママ・アライアンスというNPOが始めたもので、そのきっかけは、南米アマゾンに住んでいる、アチュア族という先住民からの呼びかけでした。アマゾンは森林資源だけでなく、地下の石油資源がかなり豊富にあつて、国際石油メジャーと呼ばれる企業群が、虎視眈々とそれらを狙っています。でも、先住民の人たちにとって、アマゾンは「自分たちそのもの」です。ネイティブ・アメリカンなどもそうですが、先住民は「自分たち」と「自然」を分けて考えるのではなく、「自分たちは自然の一部」という世界観で生きています。ですから、石油会社にアマゾンを荒されるのは、生活や土地を奪われる以上に「自分を汚される」という意味をもっているわけです。

なぜ石油会社がアマゾンに触手を延ばそうとするのかと言えば、それは私たち先進国に住む人たちが石油を大量に消費するからです。そういう意味で先住民が私たちを恨んでも不思議ではないのに、彼らは先進国のなかにもきつと通じ合える人たちがいるはずだからと言って、その人たちと手を携えようとしたのです。つまり、「これ

は人類共通の問題だから、いっしょに乗り越えていこう」と呼びかけたわけです。そして、それに応えたのが、パチャママ・アライアンスなのです。

私たちはいろいろな世界観（先住民の言葉では「夢」）をもっていますが、たとえば「経済は成長しなければならぬ」という世界観があると、当然私たちの行動も、その世界観に沿ったものになっていきます。そして「経済を成長させるためには、環境を破壊しても仕方がない」とか、「経済成長させるためには、原発はどうしても必要なんだ」といった発想になってしまいます。「環境や自然は、人間の利便のために利用していいものなんだ」というのも、ひとつの世界観です。そうすると、「木をどんどん切つて伐採することとは、人間にとって当然の権利なんだ」という発想になりますし、「土地は所有できるものなんだ」という世界観をもっていると、「自分が所有しているものなんだから何をしてもいい」という発想になりますね。

いまの環境問題や社会の問題を生み出しているさまざまな世界観を全部辿っていくと、とどのつまりは「私たちはバラバラである」という世界観に辿り着くのではないのでしょうか。これの対処に



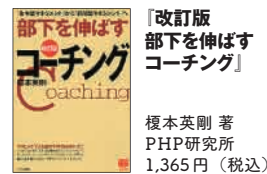
「脱原発」をスピリチュアルはどう考えてゆけばよいのか？



榎本英剛

Hidetake Enomoto

1964年、兵庫県宝塚市生まれ。一橋大学法学部卒業後、株式会社リクルート入社。人事・営業・企画・研修開発などの業務に従事し、1994年に退社。米国留学中の1995年にCTIのコアアクティブ・コーチングと出会い、翌1996年に日本人として初めてプロコーチの資格であるCPCCを取得。2000年には株式会社CTIジャパンを設立。2003年末からは、スコットランドのフィンドホーンというエコビレッジにて、家族とともに持続可能な暮らしを肌で学ぶ。2008年に帰国後、NPO法人トランジション・ジャパンおよびセブン・ジェネレーションズを設立、神奈川県藤野を拠点に持続可能な未来を創るための市民活動に取り組んでいる。



榎本英剛 著
PHP研究所
1,365円(税込)

あるのは、「私たちはつながっている」という世界観ですが、これはまさに先住民の考え方なんです。私たちも「世界がつながっている」という世界観をもつことができれば、環境破壊をしたり、貧富の格差をそのままにしたり、放射能のリスクがあるにもかかわらず原発を動かしたり、気候変動のリスクがあるCO₂を排出し続けることも、きつとなくなるでしょう。対症療法ではなく、根本

的に世界のあらゆる問題を解決の方向にもっていくためには、先進国に生きる自分たちがまず「私たちはバラバラである」という世界観を変えていく必要があるのです。それが、チェンジ・ザ・ドリーム、すなわち「夢を変える」ということなのです。

必要な資源は すでにその地域のなかにある

トランジション・タウンはイギリスで始まった市民活動ですが、どちらかというと外からのアプローチにあたります。主に気候変動とピークオイルの問題に焦点を当てていて、石油などの化石燃料に過度に依存した暮らしから、地域ぐるみでより持続可能な生活に移行(トランジション)していくという目的があります。

「トランジション・タウン」に出合っすごく驚いたのが「その地域が持続可能な地域になるために、必要な資源はすでにその地域のなかにある」という考え方をすることです。というのも、コーチングでは、「その人がより良く生きるために必要なものは、すでに

その人のなかにある」という考え方をすると、対象が異なるだけで、考え方がまったく共通しているからです。

私たちのいまの暮らしは、必要なものをほとんど自分が住む地域の外からもってきています。エネルギーにしても、食べ物にしても、地球の裏側からたくさんの化石燃料を消費してもってきている。そうしないと暮らしが成り立たないというのは、まさに依存状態です。やはり、何があっても大丈夫という変化に強い暮らしをつくるためには、エネルギーや食など、本当に生きていく上で不可欠な要素を、可能な限り地域のなかでまかなうしかありません。「トランジション・タウン」では、やりたいと思う人が手を挙げて、興味のあるテーマに取り組むという自発的な市民活動をしています。

意識が変わるだけで行動が変わらないのでは不十分ですし、意識が変わらず行動だけ変わっても、また不十分です。やはり意識と行動は、変化の両輪だと感じます。しかし、世界の問題を変えるといっても、なかなか一市民のレベルではそこまでできないので、世界を意識しながら身近な暮らしを変えるという「シンク・グロバル、アクト・ローカル」が重要だと思います。

意識が変わるだけで行動が変わらないのでは不十分ですし、意識が変わらず行動だけ変わっても、また不十分です。やはり意識と行動は、変化の両輪だと感じます。しかし、世界の問題を変えるといっても、なかなか一市民のレベルではそこまでできないので、世界を意識しながら身近な暮らしを変えるという「シンク・グロバル、アクト・ローカル」が重要だと思います。